部（前年の調査の際には踏査せられなかつた地方）を探り、また陳氏一人は樓蘭にまで行つて、六月始めにコルラに歸つた。この間別働隊は方々に分れてそれ〴〵の調査を行つた。（本書一—十三章。）これにつゞく十三、四章には、隊員ベルグマン Forke Bergman の考古學的發掘と、ヘルネル・陳兩氏の前年の探險の際の地圖作製の概略が述べられてある。（後者は西北科學考査團の略報「ゴビの謎」が書かれたときには未だ完了してゐなくてこれには述べられてゐなかつたもの、前者は本誌第一卷六號に私が紹介した所のものである。なほべ氏の報告は探險隊報告第七冊として既にストックホルムから出されてゐることを本書によつて知つた。）

コルラに歸つてからの事件は「絹の道」に詳しく書かれてあるが、どうにか同年十月に一行は迪化を立去ることが出來るやうになつての歸途に敦煌經由の自動車旅行が可能であるか否かを探るために、十一月二日安西より東に引返して再び新疆に入つたが、いろ〳〵の事情のために目的地アルトミシュ・ブラクの少し手前から引返し約一ヶ月半の後に安西に歸り着いた。（十五—十九章）すなはち「絹の道」の第十七章（英譯版では十八章）に續き、十九章（英譯版二十章）につながるコースである。

第二十章には、古來よりのロプ・ノールに關する知識の變遷特にブルジェワリスキー以來の論爭の概略が述べられ、最後の第二十一章は一九二八年以來の新河道調査の經過と、この「ロプ・ノール問題」の結論とが記されてあり、こゝの挿畫には、一八九九—一九〇〇年當時のスケッチが十數枚見られるなど、この二章は本書のうちで最も興味深い部分である。この問題についての正式の報告書はまだ出てゐない樣であるが、いづれ遠からず世に出ることであらう。

三部作の第一と第二とは、戰爭、監禁、そのほかさま〴〵の思ひ設けぬ椿事が、次から次へと勃發して、すばらしい冒險讀みものとなつてゐる。こんどのものは、それに比べれば讀みものとしては興味の少いことは已むを得ないが、それでも、單調な獨木舟旅行の間にも古墳を發掘するなど、やはりいろ〳〵の事件が起つてさほど無味乾燥ではない。〔藤枝晃〕

Studies on the Ice Age in India and associated Human Cultures.

by H. de Terra and T. T. Paterson. 1939. Washington, D. C. pp. 354, Plate VI.

本書は北米フイラデルフイヤ自然科學研究所の地質、古生物學部擔當のヘルミュー・ド・テラ氏が統裁して一九三五年に行うた印度ヒマラヤ山脈の氷河時代並びに印度の舊石器時代遺跡探險調査の結果を錄した報告書である。此の調査の豫報は既にテ

ラ氏が一九三七年同地で開催の初期人類並びに其の文化一般に關する萬國聯合大會の席上で發表して、學界に新らしい興味を與へた處であつたが、（"Early Man" 1937 所收）今般其の正報告が堂々たる裝ひをして世に出たのが本書である。調査の一行は統裁者の外にペーターソン、テイラール・ド・シャルダン等の優れた先史學・古生物學の學者が居り、またその事業がカーネーギー財團、エール大學、ケンブリッヂ大學等の援助の下に行はれて、成果を示したのであつて、報告書また是等多くの人人と學會の協力になる。

扨て本書の構成は五部よりなり、何れも正確な科學的記述を以てして居る。其の第一部は本書の大部分をなす南西カシューミール盆地の自然地理學的調査の記載と觀察である。先づ同地域の自然地理的景觀を描出した上、氷河出現以前の第三紀の地貌を論じ、その溫帶多雨の氣候から洪積世の氷河に論じ及んでゐる。ヒマラヤに於いても四回の氷期と三回の間氷期が存した事は既にダイネリイ（Dainelli）氏に依つて說かれてゐるが、著者は更にこれら氷河の殘した溪谷や、氷堆石を南西ジンド（Sind）やリイダアル（Liddar）の地方に於いて實地に調査したのであつた。本文記する印度にあつて最初の第一、第二氷期が最も廣範圍に且つ永く繼續したと云ふ事實はヨーロッパの場合と對照して吾人に興味をあたへるものがある。第二部はポトワール、インダス（Potwar Indus）卽ち北西パンジャブ地域の調査報告であつて、この中ではソアン（Soan）溪谷の人類遺物の記載が見出される。卽ち同地では第二氷期に比定される上部漂礫層（Boulder Conglomerate Z.）から僅少ながら粗雜な硅岩及び片岩類に若干の打裂を施した古拙な舊石器が發見されるのをはじめ、第二間氷期以降に比定される礫層からはアシュレアン期のかの「握り槌」に近い形の遺品の發見を擧げてゐる。而して其の第三間氷期の礫層發見のチャウントラ（Chauntra）の遺物は形の整うた立派なものである。第三部は中部インドのナルバダ（Narbada）溪谷地域の調査を錄してゐて、同地では熱帶的な赭土（laterite）の上に中期洪積世の多くの象類等哺乳動物の遺骸の他、淡水產貝類を包含した地層があり、該層から初期舊石器たる「握り槌」の他に剝片刄器類の出土が擧げられてゐる。是等の舊石器は前記ソアンの遺物とある形式的聯關を保つてゐる。次ぎに第四部としてはマドラス海岸の地域が取扱はれて、こゝでも赭土の中から舊石器の發見を錄してゐる、著者は其の文中主なる遺跡中 Vadamadurai Tank 發見の舊石器を分類してその初期のものは、赭土生成以前に屬し、形は磨滅し、變色してゐる事に注意した上盛期のものがこゝの漂礫層を覆うた赭土中から出土するので赤色したと說いてゐる。最後の第五部は上部印度のシュックル（Sukkur）並びにローリ（Rohir）

地方の石灰岩丘陵地域に散布する新石器時代或は初期金石併用期の剝片石器類に關する記述である。

本書は探險調査の報告書であつて、所謂研究書ではない。然し記する處その調査を通じて印度の初期人類並びに舊石器文化研究の上に、確たる基礎を提供した點で特筆せらるべきものがある。かの赭土が次第に南方に到る程新らしくなる事は洪積世に於けるこの地の氣候の移動を物語るものであり、更にカシューミールの第三紀終末に屬するシイワリック（Siwalik）層序からは右のナルバダのフアウナ類の源をなす熱帶的フアウナ類の他に、最も發達した猿類の遺骸を發見してゐる事實類の如きは人類最古の文化考究上にも又印度の石器時代研究にも重要な意味を持つものと思はれる。此の意味で、本書は單なる報告書たる以外に東洋學を修めるものに對し一つの意義を持つであらう。

〔藤岡謙二郎〕

蒙古學報　創刊號

財團法人善隣協會內蒙古研究所發行

四六倍判二七八頁

善隣協會の中に蒙古研究所が設置された事はかなり前に報ぜられては居たが、その發表機關については何等我々は知る所はなかつた。今回新に創刊された「蒙古學報」はこの研究所の機關雜誌として活動すべき任務を與へられたものである。昭和十三年十二月「蒙古學」第三冊が出たまゝ年四回發行の公言にもかゝはらず一向其後音沙汰なく、唯一の蒙古研究の雜誌も不幸なる運命に見舞はれたかの感を與へて居たが、「蒙古學報」はそれに代るものとして堂々たる四六倍判の體裁を以てこゝに出現することになつた。簡單な趣意書のみで、研究所の內容、研究の狀態も明かでないのであるが廣く一般の蒙古研究者の投稿を容れるさうであるし、年四回の發行で進むと云ふ。時局的な觀念に捉はれずとも、我が國の蒙古研究は地理的歷史的に考へてもつと進むべきであり、決して外國に劣らぬ成果を擧げるべき時である。再び我々が唯一の學術的な蒙古研究發表機關を得た事は甚だ喜ばしい。發刊を祝すると共に研究員諸氏の努力により今後の發展を期待するものである。儀禮的乍らも內容を次に紹介して敬意を表する事にしよう。

「元代の訴訟裁判制度」（有高巖）一個の社會がその秩序を保たんが爲に或る規範を提出する時、その規範は社會の要求性に從つて發生し其の社會の發展に應じて變遷する。このやうな社會と其の規範の一つの表現たる法制との表裏性と云ふか或は不可分離性とでも云ふべきものに着目して法律制度の歷史的發展を檢討し、以て當時の社會の史的研究の一助たらしめると云ふ事これは社會史研究の一つの方法として充分根據ある妥當なもの